

## 「モンゴルを旅して」

平成20年7月、関空を飛び立った。多くのビルが林立した街、緑生い茂った山々、日本近海の紺碧の海を後にした。モンゴル上空に近づくと、見慣れぬ乾ききった赤茶けた大地が果てしなく続く。その乾いた大地の上には黒い小さな池のようなものが次から次へと流れているように見える。「あれは何だろう？」と友人の声。しばし考えると、飛行機の下にある空の雲が太陽に照らされて地面にその影を落としていると分かった。砂漠で水がないはずなのに…不思議の意味がやっと理解できた。関空からウランバートルへ約4時間の空の旅、現地の空港には友人達が出迎えてくれていた。「久しぶりです!」「こんにちは!」と握手をかわし、大草原のモンゴルを目の辺りにし、心開かれる思いがした。

翌日は国内線で約1時間半の南戈壁砂漠への旅。東西1600km、南北970kmという広大な範囲を占める戈壁砂漠である。近いと思っていたはずのツーリストゲルがはるか彼方の地にあり、行けども行けども砂漠。道なき道をいつまでもどこまでも…月明かりの地平線を見ながら、古い車を現地の運転手さんが、まるで砂漠の中のラリーのように砂ぼこりをあげて走ってくれた。到着したのは真夜中!!そう「月夜の砂漠でのラリー」であった。出会う車もほとんどない中、1回エンストした。私たち旅人は少し不安になり、「道は間違っていないの?」「万一、車が故障したら?」「ガソリンがなくなったら?」など次々と浮かびくる不安やスリルでいっぱいだった。そうこうしている間に、いつしか到着「ヤレヤレ…」と思い、ほっとした一瞬であった。

南戈壁の赤十字へ行った。砂漠の中の広範囲な県内に点在する人々、冬の寒波で、多くの動物や家族や家々を失っても、なお生き抜こうとする人びとの心身のたくましさ、また優しさに感動した。

ヨリーン・アム渓谷(標高2200m)ここでは、8歳の少年(デビュー4回目)が私たちの馬を引いてくれた。でこぼこの山道で、ゴムぞうりが脱げても、涼しい顔で前進した。きっと「立ち止まると私たちに申し訳ない!」とでも思ったのだろう。一途な姿に頭が下がった。この地は恐竜の化石も数多く発掘され、太古へのロマンをかきたててくれた。

それから、再びウランバートルへ戻った。ここでは在モンゴル大使館、モンゴル日本センター、モンゴル白樺協会、国立孤児院、国立子供芸術センターなどを訪問し、衣料品配布活動や子供達との交流をはかり8日間の日程が終了した。

今回のガイドは、日本語も上手でよく気がつく優しい女学生だった。一生懸命に説明をし、私たちの世話をしてくれた。私は、彼女に質問した。「あなたは両親に学費を出してもらっていますか?」「いいえ、自分で決めた道を、自分で歩こうとしています。だからそんなこと両親には頼めません。」「自分のことは自分でやります。」とはっきり言いきった眼の輝きとその姿にも頭が下がった。‘エライ!’と思うと、私は涙が出そうになった。「将来の夢は?」「国連関係か外交官として働きたい。」と言っていた。「心より応援します!」彼女ならきっと夢を実現させることと信じている。

私は小さい団扇に、わかりやすい文字(私が説明しやすい、風・笑・涼・花など)を、墨で書いてお土産にした。「どれがいいですか?」「‘笑’が欲しいです。」と答えた。「いつもスマイルで…」と笑顔の美しい彼女だった。空港で私たちを見送った後、すぐ次の旅人をガイドすると言っていた。

この旅で感じたことは、大自然の厳しさ(砂漠、草原、酷暑酷暑、日常生活、衣食住等々)の中でも、たくましく生きている人々がいるという現実を目の辺りにし、日本がいかに平和で衛生的で幸せな国なのか!を体感できた。

モンゴルスタディツアーを計画して下さった日本救援衣料センターの方々や、同行した皆様方との楽しい旅ができましたことを、心より感謝申し上げます。今なおモンゴルの旅が脳裏から離れません。さらに友好を深めつつ、またいつか行ける日を夢見て、日々の仕事に励みたいと思っています。